

具体例に学ぶ

e法務ソリューション

デジタル訴訟社会を生き抜くために

text by 佐々木隆仁
AOS Technologies 代表取締役社長
▶ eLaw.jp

vol. 10



来るべき時代を見据えた 情報開示ツールの開発 最新のデジタル証拠開示ツールを紹介

デジタルフォレンジック への関心の高まり

去る3月8日(木)、アーク森ビル・アークヒルズクラブにて「訴訟対応、電子データ証拠開示の最新手法」と題したセミナーを開催しました。この連載でも指摘してきましたように、昨年从今年にかけては、警察庁や検察庁、金融庁など、日本の官公庁でもデジタルフォレンジック調査への関心が高まってきています。さらに、こうした動きが官から民へと波及し始めていることを、参加者の方々のお話を通して、改めて実感しました。

世界に目を向けますと、デジタルフォレンジック調査が関心を集めるようになったのは、2000年代後半のアメリカ合衆国においてです。06年12月、米国で連邦民事訴訟

規則が改正され、eディスカバリー法に関する規定が整備されたことがきっかけです。これは電子データの証拠開示を義務付けたもので、訴訟の当事者は、訴訟に関連すると認められたデータすべてを開示しなければならぬのです。米国で訴訟を起こされた場合、日本本社や日本国内にあるデータセンターの情報も開示の対象となりますので、開示が不十分という理由で罰則が科せられるケースも見受けられるようになりまし。

訴訟コストは 年間5000億円以上

セミナーでは、eディスカバリーツールの先進的な開発企業、米国カタリスト社の創業者ジョン・トレデニック氏を招聘し、デジタルフォレ

いくのは不可能といつてよいでしょう。

その点、カタリスト社が開発したツールは群を抜いています。グリッドコンピューティングを活用することで演算能力を高め、それによって多言語処理、とりわけ日本語や韓国語、中国語などアルファベットを用いない文字への対応力を強化しています。併せて電子メールをスレッド化し、同一内容に属する案件をまとめたり、重要書類をクラスタ化することで、検索の手間を軽減しています。その

他、関連性の高そうな文書を優先的に探し出すなど優れた検索プログラムを開発しているのです。

米国の基準と対応に学び 使いやすいツールの開発を

トレデニック氏によると、eディスカバリーについて知っておくべきことは10項目。なかでも、特に重要と思われるいくつかを列挙してみましよう。

デバイスが何であれ(パソコンでも携帯電話でもスマートフォンでも)、あるいはサービスやアプリケーションが何であれ(メールでも文書ファイルでも通話でも)、あらゆるデータが開示の対象となること。eディスカバリーの費用は当事者が負担すること。訴訟の見込みが生じた場合、証拠を保全する義務を負うこと。その際、データの収集方法も重要になってくること(保全をきちんと行わなかった場合、復元にさらなる費用と時間がかかります)……。

こうした約束事に関しては、eディスカバリーの先進国である米

ンジック調査の最新技術を解説してもらいました。トレデニック氏の前職は弁護士。法とIT、双方の知識が豊富で、この分野における将来的な見通しについて「City Tech Magazine」誌の「Top 100 Legal Technology Leaders」の一人に選出された人物です。

カタリスト社の設立は00年。大手法律事務所100社のうち、およそ8割を顧客に持っているという米国を代表するeディスカバリー企業です。日本企業に関わる案件も手がけており、09年には、パナソニックによる三洋電機の買収に際し、司法省からの依頼を受け、独占禁止法に関わる調査を担当しています。

周知の通り、企業活動はグローバル化の一途をたどっています。こうした事例が象徴するように、米国に進出している日本企業が訴訟に



電子データの容量は日 進月歩で増加していく

日本国内に限っても、電子データが重要な証拠として提出される事例が急増しています。警察庁によると、犯罪調査の対象となったパソコンや携帯電話の数は増加する一方。アンケート調査によると「パソコンや携帯電話が関わる捜査事項が増えていると感じる」と回答した警察官が82.7%もいるといわれています。

調査の際、決定的な役割を果たすのがデジタル機器に保存されているデータの解析。大量のデータを限られた時間で調べるには、最新のテクノロジーが必要になります。膨大な量のデータをすべてに目を通し、必要なデータを人力で拾い上げて



国の事例がグローバルスタンダードとして定着することになるでしょう。また、日本にも近い将来大量のデータを迅速に絞り込む時代が来るはず。そのためには、弁護士や企業法務の方々から意見をいただいたうえで、使いやすいツールを開発する必要があります。今回もカタリスト社の製品に対して、スビード感のある表示と直観的な操作性に対して、来場者から高い評価が寄せられました。今後も、今回のように、直接さまざまなご意見をいただける場を設け、開発者とユーザーを結び付けることができると考えています。